

# 遍路の図像学

内田九州男

## はじめに

最近歩き遍路が増えてきたと言われており、確かに日常的に私たちは一人二人の歩き遍路を見かける。その服装は色々であるが、見ると、“あ、遍路だ”と分かる。しかし私の観察では、札所寺院でよく見かける完全な白装束に身を固めた歩き遍路はむしろ少ないようだ。菅笠、白衣、笈摺、杖等、これらの一部を身につけているか、あるいは歩くための装備をしている等々であろうが、しかし一見すると判断がつくのである。では一体何が遍路であることの決め手なのであろうか。

こうした素朴な疑問を出発点にして、今回は、遍路は一体どんな格好（装い）をしていたのか、という点を考えてみたい。このためには、描かれた遍路をさがしあてることが一番の近道であろう。「遍路の図像学」と題するゆえんである。

## 1 現代の遍路—その装い、そしてその解釈—

現代の遍路の姿は多くのガイドブックなどで解説されている。その姿は図1に掲げたものが代表的なものである。西国巡礼と四国遍路の姿はほぼ同じである。なぜ遍路や巡礼はこのような特殊な服装や携帯品を持つのか、そこには一体どういう意味（宗教的意味）が与えられているのか、この点を考えてみたい。幸いなことに白木利幸『巡礼・参拝用語辞典』（註1）という便利な辞典があって、今必要としている用語の多くを解説してくれているので多くはこれによりたい。

巡礼・遍路の装いの中で、菅笠、輪袈裟、白衣、笈摺、金剛杖、鈴、板ばさみ、頭陀袋が目される。そこで、先の『巡礼・参拝用語辞典』でこれらの意味を調べてみる。

①菅笠（すげがさ） 特に定められた形式はなく、普通の菅笠だが、住所・氏名・「同行二人」とともに、次の四句の偈を書く。「迷故三界城」「悟故十方空」「本来無東西」「何処有南北」。今日でも四国地方や中国地方などでは、葬式の際に棺にさしかける天蓋や、骨壺の蓋の表に、この四句の偈を書く風習が残っている。つまり菅笠は棺の蓋を象徴したものであり、それをかぶって歩く巡礼は、死者であることを表している。そして、死の世界から再生することが、すなわち巡礼である。

②白衣（はくえ） 巡礼する時に着用する、袖がある白い行衣。「びやくえ」と読むこともある。本来は、背負っている笈のため、白衣の肩のあたりが擦り切れないように、この上から袖のない笈摺を着た。今日では白衣か笈摺か、どちらか一方を着用するが、白衣のほうが正式のように思われている。白衣は、いわゆる死装束で、巡礼が他界（聖なる世界）を行く者であることを象徴する。

③金剛杖（こんごうづえ） 巡礼において、手に持つ白木の杖。四国遍路では、金剛杖は弘法大

師そのもので、宿に着くと先を足のように洗って床の間に置き、尊像として礼拝する。単に杖としてのみでなく、野犬などからの護身用にもなる。巡礼の途中で死亡した際は、そのまま墓標になった。死出の旅路の身支度の一つとして、死者の棺に入れることもある。また、金剛杖には霊力が宿っており、身体の不調なところを加持すると治るといふ。

④笈摺（おいずり） 「おいずり」とも読む。袖のない陣羽織のような、木綿の白く薄い着物。室町時代ごろになると笈摺が巡礼の制服となり、聖なる行衣と見なされるようになった。現在ではほとんど白一色のものが使われている。最後の札所に奉納することで、俗界への復帰をあらわすともいふ。納めずに持ち帰る者も多く、子供に着せると泡槍の防止に効果があるといふ、冥土に旅たつ時の浄衣として棺に入れると地獄に落ちないといふ。あるいは笈摺に納経朱印を受けることもあって、「判衣」と呼ばれる。判衣は納経印を受けるためのもので、これを着用してはならないとされる。

⑤鈴（すず） 巡礼が腰につける小型の五銚鈴で、「持鈴」ともいふ。鈴の首は浄土の天音楽の模写とされ、魔を除けるためのものだが、獣から身を守る意味もある。

⑥札ばさみ ふだはさみ、「納札入れ」ともいふ、納札を持ち運ぶ時に、首から掛けて用いる。古くは二枚の板に紐を通し、その間に納札をはさんだ。現在では、箱型やビニール袋になっており、納札だけではなく、線香・ろうそく・マッチなどが一緒に入るものもある。

⑦頭陀袋（ずだぶくろ） 「さんや袋」ともいふ。修行者が欲望にとらわれず精進することを「頭陀」といふ、托鉢する時に首から掛ける袋を「頭陀袋」といった。巡礼も修行の一つというところから、頭陀袋を用いる。

以上であるが、白木氏は輪袈裟（わけさ）については、特にその意味を示していない。しかし、五来重『葬と供養』（註2）では、「棺袈裟」について、もと棺の中で死者に曳き覆った袈裟が、金襴の袈裟になると棺の外に出され、棺掛に変わったと推定し、袈裟は死者の生前の罪滅のためのものと推定している。この説を採れば、やはり死者に掛けるものである。さらに頭陀袋については、五来は同書で葬送において棺に入れる必需品としており、「死者の修行の姿」を意味するとしている。頭陀袋の意味は解釈が分かれるようだが、やはり死者の持つものといえる。

さて以上の白木説に五来説を加えてみると、現代の巡礼・遍路の姿は、死者があゝ世（他界）を修行している姿を意味していると考えてよさそうである。

## 2 描かれた江戸時代の参詣者・六部・巡礼等

では江戸時代の遍路の装いはどうだったのだろうか。この点を知るために、ここでは安藤広重の「東海道五十三次」からその中に描かれた参詣者・六部・巡礼たちを拾っていく。幸いに堀晃明『天保懐宝道中図で巡る 広重の東海道五拾三次旅景色』（註3）に各種の広重の作品が集成されているので、これから拾い出すこととしたい。同書には三種の「東海道五十三次」の図版が掲載されているので、そのうち保永堂版をA、行書版をB、隸書版をCとし、地名の次に（ ）内に示した。図が複数ある場合はそのうち1枚を掲出した。

○金毘羅行人（図2） 白装束に背に天狗の面（奉納物）を負った姿で描かれている。〈沼津（A）、府中（B）、坂の下（C）〉。

○道者（伊勢参り・抜け参り）（図3） 携帯品に柄杓を描く。おかげ参りの参加者がこの柄杓で修行を受けたのはよく知られている。〈沼津（A）、四日市（B・C）、水口（B）〉。

○六部（図4） 六十六部または略して六部という。諸国の寺社に経を奉納して歩いた。独特の笠と

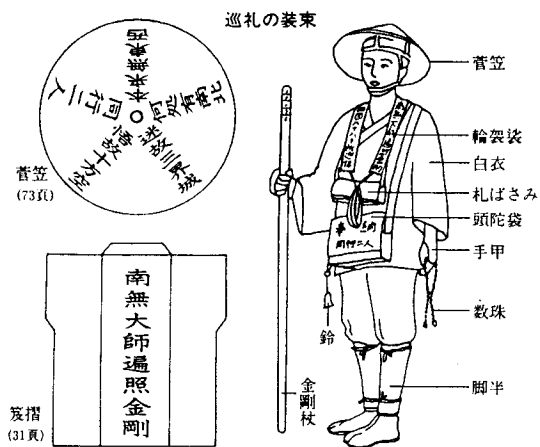


図1 巡礼の装束  
(白木利幸『巡礼・参拝用語辞典』より)



図2 金毘羅行人〈沼津(A)〉



図3 道者〈水口(B)〉



図4 六部〈坂の下(C)〉



図5 虚無僧〈坂の下(C)〉



図6 勸進聖〈日坂(C)〉



図7 巡礼〈水口(B)〉



図8 四国八十八ヶ所  
(『和歌山城下物貰図巻』)

背の長大な四角い荷物が特徴である。〈神奈川（A）、蒲原（B）、坂の下（C）〉

○虚無僧（図5） 特徴的な笠をかぶり、白装束姿で描かれている。〈坂の下（C）、蒲原（B）〉

○勸進聖（図6） 寺院建立の浄財の勸進を求めて諸国を回っていた。〈日坂（C）、岡崎（B）〉

○巡礼（図7） 白い笈摺を着し、胸に頭陀袋、背に笈といった姿が特徴的である。〈神奈川（A）、奥津（B）、府中（B）、藤枝（B）、日坂（C）、池鯉鮒（B）、水口（C）〉

以上であるが、残念なことに四国遍路と判る図像は全くない。

そこで安藤広重の「東海道五十三次」以外で四国遍路を描く図はないかと探すと、大変珍しいものであるが、図8（『和歌山城下物貫図巻』所収）がある。見ると、ここには「四国八十八ヶ所」「せつたい御心ざしはござりませぬかな」と書き、普通の旅姿らしきものを描き、胸には箱状のもの、手には鉦か小太鼓みたいなものをもつ姿が描かれている。今日の白装束姿ではない。

### 3 『近世風俗志』（『守貞漫稿』）に見る記述

ここでは前節の絵画資料の知見を文献の記録するところと比較してみよう。これら参詣者・六部・巡礼たちにまとまった記述を与えている『近世風俗志（一）』（『守貞漫稿』）（註4）を見てみよう。この『近世風俗志』は近世都市史の研究では必読文献として高い史料的价值が与えられている文献である。まずは西国巡礼。

西国順礼 西国三十三所観音に順詣する者を云ふ。その扮、男女ともに平服の表に木綿の袖なし、半身の単を着す。号けておひづると云ふ。父母ある者、左右茜染。片親ある者、中茜染。父母ともに亡き者は、全く白なり。三十三所一拝ごとに、その寺の印を押せり。

芝居等これを扮ふ者は、幅一寸余・長け四、五寸の板数枚、上の方に穴を通し、紐を貫きて首に掛くる。これ三十三所への納贖なり。昔はこれを掛くるか。今はこれを掛けず。ただ芝居にするのみ。また順礼は、三十三所の詠歌を唱へ唄ひて錢を乞ふ。杉形の菅笠に四句文等を書く。「おひづる」（笈摺）の記述が注目される。父母有る者左右茜染め、片親の者は中茜染め、両親のない者は白とし、札所を廻る毎に印を押すという。西国巡礼の目的が亡くなった父母の供養にあったとも読める笈摺の染め方である。白木氏もこういう習俗がうまれていたことは先の辞典に示していたが、もしこの記述が当時の考えを表しているとすれば、今日とは大きく異なっていたことを示すものであろう。残念ながら「東海道五十三次」等の絵画では笈摺のこのような染め分けまでは確認できない。描かれた巡礼は白の笈摺を身に付けている例が多いが、完全な白装束の例はなく、多くは平服のように、上の記述とも合う。現代とはかなり異なるようだ。尚「錢を乞ふ」という点は注目される。

次に六部、

六十六部 諸国の神仏に順拝するを云ふ。回国とも、また略して六部とも云ふ。その扮、男女ともに鼠木綿服・手おひ・股引・脚半・甲掛、皆同色。各帯前に鉦を畳ね付けて腰に下げ、あるいは手に鈴をふり、錢を乞ふ。笠一種あり。笠の条に図す。あるひは厨子入りの仏像を負ふもあり。三、四人の内一人、必ずこれを負ふ。芝居同扮。けだし鼠糰子等の服にす。

西国順礼および六部には、実に参詣の者あり。あるひは三都とも、乞巧人これに扮して出る者、はなはだ多し。秩父、坂東を順拝するもあれども、極めて稀なり。江戸にも西国順礼は往々これあり。その真偽は知らず。

六部には笠と背に厨子を負う姿が特徴的で、絵画資料と合致すると見てよいだろう。服装が鼠色に統一されていたところは確認できない。西国巡礼と六部には乞巧人（乞食）がこれに扮して出るというのは注目される。

金毘羅行人、

金毘羅行人 金びら行人の扮は、衣服および手足の服、同前皆白木綿なり、また頭を白木綿をもって突盛（つきがぶと）のごとく包み、その余布を両耳の上に捻ち結び、そのまた余を二尺ばかり垂れ下す、右手に鈴を振りて、だらにおよび祈念の文を唱す、首に施米の篁をかくる、すなはち篁は胸にあり

白装束という点は絵画資料とあっている。しかし鬼の面についての記述はない。この筆者は京坂の金毘羅行人を願人坊主の一種と見ている。「施米の篁」を首に掛けているのは注目される。

四国遍路については、

四国遍路 阿州以下四国八十八ヶ所の弘法大師に詣すを云ふ。京坂往々これあり。江戸にこれなし。もつとも病人等多し。扮定まりなし。また僧者これなし。

扮装に定まりなしとしている。特徴的な服装はなかったのである。絵画資料でも遍路を特定出来ないのはこのためであろう。（虚無僧については省略する。）

## お わ り に

四国遍路の図像と文献資料を追っていったところ、江戸時代は決まった装いがなかったというところに達した。西国巡礼でもやはり今日とは違いがありそうである。四国遍路や西国巡礼の服装、スタイルが今日ようになるのは近代に入ってからのようなのだ。今後尚絵画資料・文献資料の収集に努め、遍路・巡礼の図像を一層明確にしたい。

註① 発行朱鷺書房、1994年。

註② 発行東方出版、1992年。

註③ 発行人文社、1997年。

註④ 岩波文庫本（宇佐見英機校訂、発行岩波書店、1996年）。